

聖書日課 『からし種』 2024.12.1-12.8

<p>12月1日 (日) ダニエル 6章</p>	<p>「ダニエルは…家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり…日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた」(11節)。ダレイオス王のもとでダニエルは三人の大臣の一人に抜擢された。人は地位とカネを得ると、神を忘れ、共に生きる隣人を忘れていく。しかしダニエルの心には神が生きていた。主よ、祈りと賛美を通してあなたと隣人と共に歩ませてください。</p>
<p>2日 (月) ダニエル 7章</p>	<p>「彼(一人の王)は時と法を変えようとたくらむ。…やがて裁きの座が開かれ／彼はその権威を奪われ／滅ぼされ、絶やされて終わる」(25-26節)。7章からはダニエルの黙示(象徴的な表現で語られる預言)が続く。明確に語ろうものなら、たちまち厳しい迫害にあったからである。しかしダニエルは知っていた。人間の邪悪を裁く、神の時が必ず来ることを。</p>
<p>3日 (火) ダニエル 8章</p>	<p>「わたしダニエルは疲れ果てて、何日か病気になっていた」(27節)。ダニエルにとって神の黙示は、疲れ果て病気になるほど、重く苦しいものだった。神を恐れない暴虐の満ちた世界の中で神を信じて生きることは、ダニエルほどの信仰者でもキツかったのだ。すぐ弱音を吐いてしまう信仰薄き者に、主よ、今日あなたの恵みを信じる信仰を与えてください。</p>
<p>4日 (水) ダニエル 9章</p>	<p>「わたしたちが正しいからではなく、あなたの深い憐れみのゆえに、伏して嘆願の祈りをささげます。主よ、聞いてください」(18-19節)。使徒パウロは「何事につけ…求めているものを神に打ち明けなさい」(フィリピ4:6)と教えてくれている。主のもとにある「深い憐れみ」に依り頼んで、私たちの心の奥底にある祈りをそのまま主に「聞いて」いただく。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.12.1-12.8

<p>5日 (木)</p> <p>ダニエル 10章</p>	<p>「ダニエルよ、恐れることはない。神の前に心を尽くして苦行し、神意を知ろうとし始めたその最初の日から、お前の言葉は聞き入れられており…」(12節)。ダニエルの深い信仰と知恵の背後には、神の御心に近づくための激闘のような祈りがあったことを知らされる。神に向けられた真剣な祈りを、神はひと言ももらすことなく聞き取ってくださっている。栄光在天。</p>
<p>6日 (金)</p> <p>ダニエル 11章</p>	<p>「これら二人の王は、互いに悪意を抱きながら一つの食卓を囲み、虚言を語り合う。しかし、何事も成功しない」(27節)。昔も今も王たちは食卓を囲みながらだまし合う。この世では正直者が馬鹿を見るからだ。しかし「終わりの時」、神の真実の前に「虚言」は退けられ、人々から「馬鹿を見た」と笑われた行為が復活の光に照らされ輝く。その時を望みみて歩みたい。</p>
<p>7日 (土)</p> <p>ダニエル 12章</p>	<p>「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう」(13節)。私たちが最終的に「立ち上がらせる」のは、私たち自身の正しさではなく、十字架の主の深い慈しみと憐れみである。終わりの時に約束されている「憩い」を信じて、「主よ、終わりまで…」と賛美をささげながら歩みたい。</p>
<p>8日 (日)</p> <p>ホセア 1章</p>	<p>「行け、淫行の女をめとり／淫行による子らを受け入れよ。この国は主から離れ、淫行にふけているからだ」(2節)。自分の妻が不義を働き、その淫行の子供たちを受け入れ生活をしていく。こう神から言われたホセアはその通りにしたが、とても辛かったと思う。神が淫行の国、北イスラエルを受け入れて傷んでいることを示したのだろう。</p>